（貞享四年版）

讃佛慈悲集

原著者：西福寺 慧空

書下し文：遍立寺衆徒　大竹　功

仮立舎

讃佛慈悲集

- 本
  - 分別他力
    - 廣釋慈悲
    - 通
      - 一　内熏密益
      - 二　世間因果
      - 三　依教起行
      - 四　慈善根力
      - 五　諸仏願力
    - 別
      - 六　彌陀別益
- 末
  - 解報其恩

この冊子は、慧空著「讃佛慈悲集」を「他力」の学習の起点として、慧空の示す考え方がいかなる問題を提起するのかを検討して、「浄土真宗の他力」を明確にして、より「他力」への理解を深めることを目的とする一つである。

現代において「弥陀別益の他力」を「転成」ということで明らかにしようとした宗正元先生（令和二年五月二十日九十三歳で逝去。真宗大谷派本山の出版部長や宗門立の「東京大谷専修学院」院長等を歴任）の「言い淀み」が感じられる点も、何とかして超えていくための資糧にできることを願い求めたいと思う。

「讃佛慈悲集」　書下し文における凡例

一　文献名は二重カギ括弧、『〇〇〇』のように示し、その内容を「□□□」のようにカギ括弧で示した。

二　この冊子は、対象者を「ある程度浄土真宗のお聖教に馴染んでいる人」を対象にしているので、ルビは最小限度にとどめた。

三　文中の改行・ふりがな・太字・行空けなどは、書下し文作成者の大竹が、私におこなった。

四　文字右添え字の「数字●数字」は、●の上の数字は「原本の丁の数」を示し、●の下の数字は、その丁の何番目の引文かを示す。

五　文中右添え字の「▽数字」「▲数字」は、数字は「原本の丁の数」を示し、「▽」は「右丁」を「▲」は「左丁」を示す。

六　文中「乃至」の所には「右添え字」で「乃至されている文字数」を参考までに記した。（『文献確認』を参照されたし）

七　文中の経・論・釈の名の左に添えた〇印は、確認によって原文を補正した文字。●印は、疑義が残る経・論・釈の名。

八　文中「仮名遣い」「旧漢字の使用」にいささか難点があるが、容恕を請う。

讃[▽1]佛慈悲集　本

仰ぎ敬いて、彌陀他力の慈恩を讃せんと欲(おも)ふ。其の事極めて多く、其の文極めて繁し。或いは総じ、或いは別して、詳(つぶ)さに盡くすべくあらず。或いは經を、或いは論を、悉く出すこと能はず。今略して要を取りて文を集むるに、暫(しばら)く三章を分け、若し三章を讀(よみ)て一念の慙愧(ざんぎ)感嘆の心を發さば、自他の益、虚しかざらん歟(や)。

一には**他力を分別**す。二には**廣く慈悲を釋す**。三には**其の恩を報ふ了を解す**。

第一に、**他力分別**の中に、六重の通別あり。一に**内熏密益**、二に**世間因果**、三に**依教起行**、四に**慈善根力**、五に**諸佛願力**、六に**彌陀別益**[10]なり。

一に**内熏密益**とは、眞如縁起の義なり。『起信論』[11]の消滅門を按ずるに、云く「不生不滅は

眞如の性。無明の熏動に因るが故に、消滅の心有り。此[▲1]れ即ち覺は不覺を成ずるなり。覺と不覺と更に互いに相ひ熏ず、不覺を以て本覺に熏ずるが故に。則ち諸々の染法を生じ、生死に流轉す。本覺を以て不覺を熏ずるが故に、則ち諸の淨法を生ず。流を返して纏より出(い)だす。而して本覺を成ず」と。○[1●2]『地持經』に云く、「性に二種有り。一に性種性、二に習種性」と。○[1●3]『瑜伽論』三十五に云く、「種性を謂はば略(ほぼ)二種有り。一に本性住種性、二に習所成種性なり。本性住種性とは、菩薩は六處に殊勝にして、是の如きの相有りて、無始世從り展轉し來りて法而の所得なり。習所成種性とは、前の串習(かんじゅう)の善根なり。乃至(大幅な頁)又此の種性を亦種子と名づく。亦名づけて性となす」と。○[1●4]『涅槃經』二十八獅子吼品に云く、「衆生の佛性に亦二種の因あり。一には正因、二には因縁なり。正因は謂く諸の衆生なり。因縁は謂く六波羅蜜なり」と。○[1●5]二十六に云く、「因縁とは即ち了因[▽2]なり」と。○[2●1]天台の云く、一切衆生、此の三因佛性を具せず、廣く光明玄(?)の如し。凡そ彈指・散華・隨聞の一句なりとも縁因了因の縁起無くんば、眞俗・染淨、頓悟・漸修、新熏・本熏の熏發、ならざることなし。外熏内發・内熏外發、亦是れ、他力發起と謂うべきなり、と。○[2●2]『宗鏡録(すぎょうろく)』十八に云く、「問う、此れ亦衆生、自家

の佛力にして、他佛の力にあらざるなり。答う、佛地に自他無し。汝強いて自佛・他佛を謂うは、衆生の心盡さざるのみ」と。廣說　此の義廣く性相に辨ずるが如し。淨家の中に於て鎮西の人師、盛んに此の内熏の義を以て、殊に彼の彌陀の他力を成ず。云云　其の遠きㄱ甚だしき矣（ことよのう）。同日之論に肯うをなさず。但し、熏の義、一切に通ず、復た永く遮つべしと謂うにはあらずとなり。

二に、**世間因果**とは、初めに世間の樂因、皆他力に由って成ずることを明かす。次に世間[▲2]の樂果、亦佛力に由って得ることを明かす。初めに樂因他力とは、然るに一切の世樂は福業に因らざるㄱ無し。一切の修福は、佛力に由らざること無し。若し佛菩薩の開示無くんば、誰か一法を聞き、誰か一善を修せんや。乃至　東西を知り、邪正を識る、皆是れ佛力なり。いかにいわんや、自利利他の分有らんをや。〇[2●3]『華嚴』の偈に云く、「衆生種々の樂及び諸の方便智、皆佛智に依って起こる」と。〇[2●4]『大乘同性經』に云く、「是れ如來力、彼の衆生をして諸法を知るㄱを得しむ」と。〇[2●5]『入楞伽經』三に云く、「大慧、諸の如來の住持力に依

るが故に、山河・石壁・草木・苑林及び妓樂・城邑・聚落・宮殿・屋宅、皆能く說法の聲をい出だす。自然に皆妓樂の音を出だす。大慧、いかにいわんや心有る者、聾盲・瘖瘂・無量の衆生、諸苦惱を離る。大慧、佛如來住持の力の如き無量の利益もて、衆生[▽3]を安樂す」と。○[3●1]又云く、「若し諸の如來、菩薩の爲に住持力を作りたまはずば、諸の外道・聲聞・辟支佛、魔事に墮せん。故に阿耨多羅三藐三菩提を得ず」と。○[3●2]『方廣總持經』に云く、「菩薩、未來の五濁世の中に於て陀羅尼三昧を得れば、一切皆是れ、佛の威力なり。是故に善男子、若し其の法師を誹謗すること有れば、即ち謗佛を爲す等として異有る事なし。善男子、佛滅度の後、若し法師有りて、善く樂欲に隨て、人の爲に法を說き、能く菩薩大乘を學する者及び諸大衆をして、一毛歡喜の心を發すこと有りて、乃至暫く一滴の涙を下さば、當に知るべし皆是れ佛の神力なり」と。○[3●3]又云く、「若し聲聞の法を說き、もしは菩薩の法を說かん。當に知るべし、皆是れ如來威神護念力の故なり。諸菩薩等に是の如き說を作さしむ」と。○[3●4]『十住毘婆沙論』十一に云く、「もし一切衆生智慧勢力[▲3]、皆辟支佛の如くんば、是の諸の衆生、佛意を承けずして一人を度さんと欲せば、是の處有ること無し」と。○[3●5]『大集經』十七に

云く、「當に知るべし、一切菩薩の所得の辨説、能く以て衆生を利益すること、皆是れ如來の神力なり」と。[3●6]○『薩遮尼乾子經』一に云く、「諸の善知識の攝せざるところの者は、此の法に入らず。諸佛の爲(みため)に住持されざる衆生は、此の法を聞かず。諸の如來加力持を除きて、能く此の法を聞き、能く此の法を信ずと云はば、此の處(ことわり)有ること無し」と。[3●7]○『華嚴經』六に「若し一切の佛の爲に護らるるときは、則ち無上菩提心を生ず」と。[3●8]○『報恩經』七に云く、「我能く衆生に大智辨を惠施す」と。[3●9]○『寶性論』一に云く「一切諸草木、大地に依止して生ず。地に分別の心無くして、而(しこう)して增長成就す。衆生心の善根は佛地に依止して生ず。佛、分別の心無くして、而して增廣成就す」と。[3●10]○『佛地經論』五に云く、「一切衆生の所有の善法及び殊勝[▽4]の果、皆是れ如來の慈悲願力を增上緣と爲して、而して獲得せる所なり」と。[4●1]○『華嚴經』十二に云く、「此の菩薩、是の如く無量無邊の信を成就す。不退轉・信不亂・信不壞・信不著・信有根・信隨順す。聖人の信は、如來聚性の信なり。則ち能く一切の佛法を護持して、一切菩薩を長養する。善根もて一切の如來に隨順す。善根は一切の佛の善方便より生ず」と。

次に樂果佛力とは、『無上依經』[4●2]下に云く、「若し如來出世せざらしめば、唯苦受のみ有りて其の身を逼めん。一切世間を唯だ惡道にして但だ叫喚の大音聲のみを聞かん」と。○[4●3]『大論』三十六に云く、「若し菩薩、善法を說くこと無くんば、世間に天道・人道・阿修羅道有る¬無し。樂受・不苦・不樂受あること無くんば、但だ苦受のみ有りて、常に地獄啼哭の聲のみ有らん」と。○[4●4]又三十五に云く、「世間樂・涅槃樂、皆佛菩薩に由って得[▲4]」と。○[4●5]『大集經』十に云く、「一切衆生、大乘に因るが故に、人天の樂及び涅槃の樂を得」と。○[4●6]又『大論』三十六に云く、「問て曰く、菩薩の因緣を以ての故に、世に於て善法有ること而してあるべし。刹利大姓・婆羅門大姓・居士大家、若し世に菩薩無くとも、亦此の貴姓有らん。云何皆菩薩より生まると言うや。答て曰く、菩薩の因緣を以ての故に、世間に五戒・十善・八齊等有り。是の法に上中下有り。上は道を得、中は天に生まれ、下は人と爲る。故に刹利大姓乃至居士大家有り。問て曰く、若し世に菩薩無くとも世間に亦五戒・十善・八齊・刹利等の大姓有らん。答て曰く、菩薩は身を受くること種々、或いは時に業因緣身を受く。或いは變化身を受く。世間に於て教化して諸の善法・世法 乃至[二十文字] 出世の法を說き、世界を護持す。菩薩

の法無しと雖も、常に世法を行ず。是の因縁を以ての故に、皆菩薩に従て有り。問て曰く、菩薩は清淨にして、大慈悲を行ず。云何世俗の諸の雑法を説くや。答て曰く、二種の菩薩有り。一は慈悲を行じ直に菩薩の道に入る。二は敗壞の菩薩亦悲心有り。治むるに國法を以てす。乃至 世間の諸の富貴は皆二乘の道に従いて、二乘の道有り。佛に従て有り」と。○『大論』●歎度品に云く、「菩薩の來たるに因るが故に、人道・天道・刹利大姓を出生す。乃至 菩薩の來たるに因るが故に、世間に便ち飯食・衣服・臥具・房舎・燈燭・摩尼眞珠 乃至 金銀等の諸寶物生ずる有り。舎利弗、世間所に樂具有り。若しは人中、若しは天上 乃至 一切樂具は皆菩薩に由って有り。何を以ての故に。舎利弗、菩薩摩訶薩は菩薩の道を行ずる時は六波羅蜜に住す。住すれば自づから布施を行ず。亦布施を以て衆生を成就す。乃至自ら般若波羅蜜を行ず。亦般若波羅蜜を以て衆生を成就す。舎利弗、是の故に菩薩摩訶薩は衆生を安樂せんが爲の故に、世に出現す」と。○『大論』の四十に釋して云く、「問て曰く、若し菩薩の因飲食等の諸寶物に有らば、人なんぞ力を以ひ求生を作し諸の辛苦を受け乃し得るや。答て曰く飢餓劫の時の人、其の功力を設くと雖も、亦得る所無し。衆生の罪重きを以てのゆ

えなり。菩薩、世々に布施・持戒の善心を讃嘆す。是れ三福の因縁の故、上中下有り。上は念ぜば便即得るなり。中は尊重供養して自ら至る。下は功力を施して乃し得る。是れを以ての故に、菩薩に因って、實にして虚しからざるを説く。樂の因縁はなはだ多し。稱計すべからず。今佛、略して天樂・人樂・涅槃樂、皆菩薩に由って得ると説く。此の中に佛自ら説く菩薩六波羅蜜に住すれば、布施を行ず。亦衆生をして布施を行ぜ教む。衆生、自ら布施を行ずと雖も、菩薩[▽6]の教道無ければ則ち行ずる「あたはず」と。問て曰く、「解脱の樂を餘して、此の二種の樂は是れ衆生、結使を生ずる處なり。貪欲の因縁の故に恚を生ず。菩薩、何を以て是の結使の因縁を教道するや」。答て曰く、「菩薩、咎無からん所以は、何ぞ。菩薩は慈悲清淨心にして、衆生に樂の因縁を與え修福の事を教う。若し衆生、清淨にて福徳を行ずること能はずば、菩薩に於て何の咎あらんや。人、好心にして井を作り、盲人中に堕して死するに、作る者、罪無きが如し。人の好食を設けて人に施するに了を知らざる者、多食して患を致すに施す者、罪なきがごとし」と。已上　第二十六に亦此の説有り。　[6●1]〇私に云く、有漏の世福、第三生の怨に爲ると雖も顛倒の善果、梵行を壞するの失有りと雖も、脱苦與樂の願行、

假より入眞の方便、其れ恒に此の如し。○[6●2]『涅槃經』十四に云く、「或いは衆生有て財貨を貪せば、其の人に於て自ずから其の身を化す。轉輪王と作て無量歳に其の所須に隨[▲6]い種々供給し、然して後教化す。乃至[十三文字]若し衆生有て五欲に貪着し無量歳に於て妙五欲を以て其の願を充満し然して後勧化す」と。乃至廣說　○[6●3]『大經』上に法藏の願に云く「我、無量劫に於て　大施主と爲りて　普く諸の貧苦を濟はずは　誓う、正覺を取らじ」と。○[6●4]『大集月藏分』第十二に云く、「時に世尊、乃至[五十四文字]我今諸の衆生を憐愍するが故に此の果報を以て分て三分と作す。一分を留めて自ら受く。第二分は我滅後に於て禪解脱三昧相應せる聲聞に與へて、乏しき所無からしむ。第三分は彼の破戒・読誦經典相應せる聲聞、正法像の頭を剃りて袈裟を著たる者に與へて、乏しき所無からしむ。彌勒、我今復、三業相應せる諸聲聞衆・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を以て、汝が手に寄附す。乏少せしむる勿れ。孤独にして而して終わる。及び正法・像法において禁戒を毀破[▽7]し袈裟を著する者を汝が手に寄附す。彼等の諸の資具に於て乏少にして終わらせしむること勿れ」と。○[7●1]又『佛地経論』の第六を按ずるに、「諸佛、成所作智を以て種々變幻して常に衆生を利す。所謂如來の化身に三種の別有り。一には身化、

二には語化、三には意化なり。身化に三有り。現神通と現受生と現業果となり。語化に亦三あり。慶慰と方便と辨揚となり。意化に四つあり。決擇と造作と發起と受領となり。三業の十化、無方無碍なり」と。〇彼(かの)『論』の七に云く、「身化に三種有り。一には自身相應。謂く、自身を化して轉輪王等種々の形類と爲る。及び種々の諸の本生の事を現ずる。二には、他身相應。謂く魔王に化して佛身と爲る等、舍利弗を變じて天女と爲す等、他身の上に寄せて、亦種々變化形類を現ずるなり。三には、非身相應。謂く、大地を現じて七寶等と爲す。乃至(二十文字)自他身を離れて別に現じて情・非情の色種々形類を化作するなり。地を動じ光風の香を放つ等の事、皆諸の有情を利樂せんがための故なり。一切皆佛の化身の業と名づく」と。〇『華嚴經』に佛身に十無碍を說く中に、「第八に依正無碍とは、謂く此の身即ち一切器世間と作(な)る」と。〇『經』の第七の偈に云く、「或いは日月を作りて虛空に遊び、或いは河池井泉等と作る」と。宗鏡録十六巻之を具す　〇『百福經』に佛八十種の形を現わるゝを說く中に云く、「五十二は粉米像、五十三は麩麥像乃至(二十文字)果樹」と。〇『佛地經論』に又云く、「是の如く語化に亦三種有り。一には自身相應。謂く佛自身化して梵音を現じて遍く無邊諸世界等の種々の語業を告ぐ。二

には他身相應。謂く聲聞・大弟子等をして佛の梵音を以て大乘甚深の法等を宣說せしむ。是の故に聲聞・諸菩薩等、己が分にあらざる甚深[▽8]の妙法を說く。皆是れ如來變化の所作なり。彼の自力にあらず。三には、非身相應。謂く山海草木等の類と化し、乃至虛空も亦音聲を出(い)だして大法等を說く。是の如くを皆變化の語業と名く。心化には唯二有り。一には自身相應。謂く自身上に種々の心及び心法影像差別を化現す。二には他身相應。謂く他心をして亦種々の心及び心法影像差別を現ぜしむ。此れ並に相分にして見分の現ずるに似れり。有義は定力能く自心非分の法を解せしむ。自心の化と名け、有情に加被す。愚昧の者をして深細の法を解せしむ。失念の者をして正憶念を得せしむ。他心を化と名く」と。

私[8●0]に云く、凡そ本生紀伝等を披くに、或いは草禽獸人語を出だす┐あり、或いは水聲風音を聞いて道を悟る有り。或いは頑惡は心を變じ善に移り時有って上智を發す。或いは言語起居甚非分を作(な)す。予 是の如きの事に於て頗る疑怪を爲し、今[▲8]『佛地経論』を披きて、明らかに知る、皆是れ佛化の利物なりと。倩(つらつら)上の諸文を按ずるに、智の言は則ち権智・實智・俗智・眞智なり。乃至 黒白を分かつ、甘酢を知るも、皆是れ佛恩なり。行を言へば則ち世間・

出世の一切の善業 乃至 低頭舉手善毛髪の微福又眼の見、耳の聽、手の握、足の踏 乃至 瘖唖の指麾するも、亦皆佛恩なり。又復日月上に臨み山海下に應じ、櫻梅春を告げ蘭菊秋を呈し、水の流れ地の持ち、絲竹音を吐き、金玉世を資け、百藥痾を治し、五穀命を續け、一縷を桑得り、一粒は寒を防ぎ飢えを補うに耕し獲る。乾坤依正、芥子の樂にして、自他朝夕支身の事、悉く皆他力なり。悉く皆佛恩なりと。

○[8●1]『心地觀經』三に云く、「我が所說の四恩の義の如し。是れを能く世間を造る因と名く。一切萬物是れより生ず。若し四恩を離れては得るべからず」と。○[8●2]『自鏡録[▽9]』に懐信法師の云く、「六尺の躯を長じ百年の命を全うする者、是れ誰か致す所あらんや。則ち我が本師の願力なり。予、且く約かに五十の年を計るに、朝中の飲食に蓋し三百餘硯を費やしておるがね。寒暑の衣藥は蓋し二十餘萬を費やすとなぁ。或いは復、無明暗起と邪見横に生じ、非法に棄て、用い、非時に飲噉す。費する所、又量り難きことよ。此れ皆他力より出て、我用を資成す」と。廣說

誠にそれ、假令ひ足を乾坤の外に下ろすの地有りと雖も、必ず身を佛恩之外に安ずるの處無

し。始世以來正に常に然(しか)なり。呼(ああ)、廣大の恩德海、實に其の際無し。天台は恒沙の身命を捨つとも一端をも報じ難しと云へり。我ら未だ一身を捨てず。哀れむべし、慙ずべし。殊に痛むべしとなり。願う。一切男女貴賤、佛の慈恩を遺(わす)るること勿れと、よ。

三に**依教起行**とは、一切の修行は教えに由らざること無し。發心修行更に自力に非ず。[▲9] 教誨の慈恩を稱して他力と名く。[9●1]○『心地觀經』三に云く、「一切菩薩勝道を修するに、四種の法に、善友に親近することを要するを當に知るべし。第一に聽聞正法と爲す。第二に如理思量と爲す。第三に如法修証と爲す。第四に十方一切の大聖是の四法を修して菩提を証すとなり」と。[9●2]○『大集』の十一、『涅槃』の二十三、『華嚴』の行願品等に、廣く之れを說く、と。[9●3]○『涅槃經』の三十二に云く、「一切の梵行は、善知識を因と爲す。一切梵行の因無量なりと雖も、善知識を說けば則ち已に攝盡す」と。[9●4]○是れを以て和尚の『法事讃』に云く、「釋迦佛の開悟の因にあらずんば、彌陀の名願、いずれの時にか聞かん」と。[9●5]○又云く、「仰ぎ惟(おもんみ)れば、大悲の恩重くして等しく身田を潤す。智慧冥(はるか)に加して道芽增長す。慈悲方便視教隨宜にし

て彌陀を念ぜしめ、淨土に帰せしむ」と。○又云く、「四十八願慇懃に喚びたまふ。佛の願力に乗じて西方に往けり」と。○『般舟讃』に云く、「敬いて一切往生の知識等に白す。大いに須く慙愧すべし。釋迦如來實に是れ慈悲の父母なり。種々に方便して我らが無上の信心を發起せしむ。乃至 若し能く教に依って修行する者は、則ち門々に見佛して淨土に得生す」と。○又云く、「曠劫より已來、苦海に沈み西方要法を未だ曾て聞かず」と。○又云く、「娑婆長劫の苦を免れ得るは、特に知識釋迦の恩を蒙るによる」と。○又云く、若し知識佛を稱すること教えること非ずんば、如何して彌陀國に入ることを得んや」と。○又云く、「若し釋迦勸めて念佛するにあらざれば、彌陀淨土何に由ってか見奉らん。心念に香華遍く供養し、長時長劫に慈恩を報ぜん」と。○『玄義分』に云く、「仰いで惟れば釋迦は此の方より發遣し、彌陀は即ち彼の國より來迎したまふ。彼に喚ひ此に遣はす。豈、去かざるべけんや」と。○『散善義』に云く、「仰いで釋迦發遣して西方に指向したまふ」を蒙り、又、彌陀悲心を以て招喚したまふに藉て、今、二尊の意に信順す。乃至 彼の願力の道に乗る」等と。○私に云く、思修智慧は聞を自ずから成じ、聖徳の証果は聞を始めとして三種の知識を得た

まへり。教授の恩を以て最も重しと爲す。

是の『大集』[10●8]の堅護分五を以て云く、「其の求法の者をば、法師に承事す。乃至[十二文字]奴の主に隨ふ如きは、臣の君に事ふるが如し。亦而なり」と。[10●9]亦云く、「善知識に於て諸佛の想を起し、菩薩の處に於て乖離を念ぜず」と。[10●10]亦云く、「法師の所に於て常に隨喜し尊重恭敬する┐、如來に等しくすべし」と。[10●11]『大集經』第十五に云く、和尚阿闍梨の所に於て憍慢心無く、尊重給侍する┐修す。如法に教誨し拒逆の所無き┐を修す。說法人の所に於て世尊の想いを生じ、其の短を求めざる┐を修す」と。[10●12]『十住毘婆沙論』の四に云く、「問て曰く、何らの法か菩提心を失すや」。答て曰く、「四法有りて菩提心を失す。一には法を敬重せず、二には憍慢心あり。三には妄語にして實無し。四には知識を敬はず。是の四法ある者[▽11]は、若しは今世の死の時、若しくは次の後世に於て、則ち菩提心を忘失す」と。

[11●1]私に云く、教授の恩重しと雖も、此の恩一切に通じて未だ他力の回施と爲るに足らず。大乘小乘顯密の行者、何の慈海に預からず誰か此恩を蒙らざるや。通別淺深學者、之れを辨ずべきなり。

四に慈善根力は、『涅槃經』[11●2]十四に八證を說く。是れ一には醉象を伏す。二には力士を下す。三には盧至を化す。四には女人を度す。五には割瘡を塗る。六には調達を摩す。七には群賊を救う。八には釋女を醫すなり」。彼の文に云く、[11●3]「復次に波羅奈城に優婆夷有り。名けて摩訶斯那達多と名く。已に過去の無量光佛に於て諸の善根を種ゑたりき。是の摩訶斯那、夏の九十日衆僧を屈請して醫藥を施し奉る。是のとき、衆中に一の比丘有り。身は重病に嬰り、良醫之れを診る。當に肉藥を須べし。若し肉を得ば病則ち除くべし。[▲11]若し肉を得ざれば、命全うならず。時に優婆夷、醫の此の言を聞いて、尋ねて黃金を持て遍く市里に至て是の如き言を唱う。誰か肉を賣るもの有らん。我、之れを買わんと欲す。若し肉ある者、當に金と等しくすべし。城市悉く周遍するに得るㄱ能はず。是こに優婆夷尋ち自ら刀を取りてその股の肉を割きて、切て以て羮と爲し種々の香を下して病比丘に施す。比丘、服し已りて病即ち癒るㄱを得たり。優婆夷、瘡を患い苦惱し、堪忍するㄱ能はず。即ち聲を發して言はく、南無佛陀南無佛陀と。我、その時に於て王舍城に在り。其の音聲を聞いて是れ女人に於いて

大慈悲心を起す。是の女、尋ち我、良藥を持ちて其の瘡の上に塗るを見る。還復して本の如くに我即ち爲に種々の妙法說く。法を聞き歡喜して阿耨多羅三藐三菩提心を發す。善男子、我而時に於て實に波羅奈城に往至して、藥を持て彼の優婆夷が身に塗らず。善男子、當に知るべし。皆是れ慈善根[▽1-2]の力、彼の女人をして是くの如きの事を見せしむ。復次に、善男子、調達惡人は貪して足るヿを知らず、多く酥を服するが故に、頭痛に腹滿ち大苦惱を受け、堪忍するヿ能はず。是苦の言を發す。南無佛陀南無佛陀と。我時に優禪尼城に住在せり。其の音聲を聞いて即ち慈心を生ず。而の時に調達尋ち我其の所に往至して、手をもって頭・腹を摩ぜ、鹽湯を授與するを見る。而して之れを服しめて服し已りて平復す。善男子。當にしるべし。皆是れ慈善根の力、提婆達に是の如きの事を見せしむ。復次に善男子、憍薩羅國に諸の群賊其の數五百に群有り。黨抄劫(?)して害を爲すヿ滋くして甚だし。波斯匿王、其の縱暴を患い兵を遣わして伺捕り、得已りて眼を挑れり。逐って黒暗叢林の下に著く。是れを諸の群賊已に先佛に於て衆の德本を植えき。既に目を失い已りて大苦惱を受く。各是の言を作さく「南無佛陀南無佛陀。我ら今は救護するもの有ること[▲1-2]無し。啼哭號咷す」。我、時に祇

洹精舎に住在せり。その音聲を聞き、即ち慈心を生ず。時に涼風有り、香山の中の種々香藥を吹いて其の眼眶(まなかぶら)に満つ。尋ち還りて眼を得る┐本(もと)の如くにして異ならず。諸の賊、眼を開くに即ち如來其の前に住立したまふを見る。而して爲に說法したまひて、賊、法を聞いて已に阿耨多羅三藐三菩提心を發す。善男子、我、而の時に於て實に風を作(な)して香山の中の種々の香藥を吹いて、其の人の前に住して、爲に法を說かず。善男子、當に知るべし。皆是れ慈善根の力、彼の群賊をして、是くの如きの事を見せしむ」と。[12●1]○又云く、「善男子、我の說く是の慈に無量の門有り。謂はゆる神通なり」と。

私[12●2]に云く、諸佛諸菩薩は衆生を成就したまふ。種々の力を以てす。『大經』に因力・緣力・意力・願力・方便之力・常力・善力・定力・慧力・多聞力・波羅蜜力・正念力・正觀力・通明力・調伏力 乃至[▽13] 回向力等、恒に衆生を利し、是くの如くの力、若し利樂せずんば何を名けて力と爲さん。

○[13●1]『十住毘婆沙』十一に云く、「力は、扶助に名く」と。○[13●2]『觀經疏』の定善義に云く、「如意と言うは二種あり。一は衆生の意の如し。彼の心念に隨て皆之れを度すべし。二は彌陀の

意（おんこころ）の如し。五眼圓（まどか）に照らし六通自在にして機の度すべき者を觀（みそな）はして、一念の中に前無く後無く心身等しく赴き、三輪開悟して各々益する丁、同じからず」と。

〇[13●3] 私に云く、上の如き諸力、恒に能く物を利し、佛力無量なれども今（いま）慈善根力を取ると之れを言うのみ。然るに此の義、亦一切に通じ、諸益に亘る。故に是れ亦彌陀不共の他力と爲すべからず。問う、此の慈力は但し果人に限るや。答う、知ること難なり。若し觀音の感應の如くんば、此の力の所爲歟（か）。又大善師の如きは、一聲師の名を稱すと、群鹿空に飛ぶ。法華師傳に是れ慈悲三昧[▲13]の徳なりと。『寶王論』に見ゆ。然れば則ち因地に於て亦能く慈力を施す者をや、と。

五に**諸佛願力**とは、佛々の願力、各々冥加して開化し利益す。其れ之の有縁の衆生なり。

〇[13●4]『六十華嚴』十四に云く、「菩薩不可思議の大願、悉く皆一切衆生を救護す。菩薩、此の願を立て已りて三世諸佛の廻向を修學す」と。〇[13●5]又云く、「菩薩、身口意業の莊嚴を具足して、莊嚴一切の功徳を具足す。復、是の念を作して是の善根廻向功徳を以て、一切衆生

に、常に諸佛を見さしむ」と。廣說 ○[13●6]又云く、「大願を捨てずして、衆生を救護す」と。○[13●7]『註論』に云く、「諸佛菩薩は身口意の三業を莊嚴して用いて衆生虛誑の三業を治すなり」と。○[13●8]『八十華嚴』廻向品に云く、「又、一切衆生をして勝欲樂清淨の心を獲せしめんと欲す」と。故に又、「一切衆生をして善欲樂[▽14]清淨意を得せしめんと欲すが故に」と。又、「一切衆生をして大廻向を得て、普く一切の諸の衆生に覆いしめんと欲すが故に」と。[14●1]又云く、「一切の衆生をして廣大の益を得て、普く衆生を益する。皆佛に於て信解を生ぜしむ故に」と。○[14●2]『疏』の二十八に釋して曰く「菩薩悲智の深妙を顯わす」と。○[14●3]『四十華嚴』の二十七に云く、「諸の衆生の心行不具なるを見て、其れをして皆清淨具足する┐を得しむ」と。○[14●4]私に云く、諸佛の別願具に出すべからず。且く觀音に帰するが如き危厄を藥師を念じて免れる、病苦を除く。是れ各化別願の功、是れ佛力なり。其の心を發し、其の行を立て、其の益を得。始終因果皆其の佛力なり。一佛の益に就いて因縁果の三あり。一に因他力とは、因とは心なり。病患の人、藥師に帰するの心を發す。是れ彼の佛願の如くなる┐有るを聞くに由るが故なり。即ち發心他力なり。二に縁他力とは、彼の佛、其の眷族の神[▲14]等を使って、

其の行者を護る。私に云く、願力を以て恒に之れを住持す。即ち縁他力なり。三に果他力とは、正しく病を除く┐を得る。　乃至眞利を得。何に爲れぞ自力ならんや。即ち果他力なり。彌陀佛も亦此の三有る┐。因とは往相の信樂なり。縁とは攝生護念等の強縁なり。果とは往生なり。此の三つ、皆願力に依って成得せしむものなり。具には、下に辨ずるが如し。

○[14●5]『華嚴經』七に云く、風を以て佛に況す。謂く、風能く不思議廣大の事を起す。世界を起し、天宮を持ち雲を興し、穀等を熟す。量るべからず。偈に云く、「風能く波羅蜜を學すこと能はざる、亦佛の諸功徳を學ばざるすら、猶不可思議の事を成ず。何に況んや諸願を具足する者をや」。又龍を以て佛に況し、天を以て佛に況す、と。文廣きが故に之れを略す。

六に**彌陀の別益**とは、上來の義皆他力と名くべしと雖も、亦猶自力也。[▽15] 彌陀一佛の本願念佛は、是れ不共の別意、他力の中の他力、大悲の中の大悲なり。問て曰く、「諸佛の願海を按ずるに、聞名不退の願有り、信心の正因の義あり、称名の願有り、係念の願有り。隨て『大經』を披くに、法藏已然に二百十億の佛願の中に散って四十八等の願在り。在るを以ての故

に、見て攝取す。法藏比丘の今日始めて發するに非ず。何を以て不共と名けるや」。答て曰く、「爾(しか)なり、實に知ること難しと爲す。今試しに二義を以て不共の稱を成す。一に他力の義、二に横超の義なり。一に他力とは、唯知る、惡を作りて出離の縁有ること無きの機、煩惱賊害の故に、心想羸劣の故に、生死甚厭い難く佛法復欣び難し。此れ即ち垢障覆い深くて淨體顯彰するに由し無き所以(ゆえん)なり。然るに今、爲に他方の凡聖類を引くを以ての故に。佛、此の不思議を現ずる故に、乃(いま)し能く願[▲15]生の心を發起せしむ。鸞師の謂う所の草を置き牛を引くとは、是れなり。復(また)諸佛の願は心を修し行を修す。則ち願に乗ずれば益を取る。今は則ち爾らず、無善造惡にして一善を假(にせ)ずとも、一念聞名の時直ちに不退の益を成ず。更に機を選ばず還て惡人を取る。是れ不共の他力なり。二に横超とは、垢障の凡愚、直ちに報土に入る」、諸佛の然らざる所、性相の說かざる所なり。故に不共なりと云う」。〇[15●1]『論註』に云く、「因無くして他の因の有るには非らざるなり」と。〇[15●2]又云く、「因淨なるが故に果亦淨なり」と。〇[15●3]又云く、「然るに覈(まこと)に其の本を求めれば、阿彌陀如來を增上縁と爲るなり。他利と利他とを談ずるに左右有り。若し佛より言はば宜しく利他と言うべし。衆生より言はば他利と言

うべし。今将に佛力を談ぜんとす。是の故に利他を以て之れを言う。當に知るべし、此の意なり。凡そ是れ彼の淨土に生ずると及び彼の菩薩人天所起の諸行は、皆阿彌陀如來[▽16]の本願力に縁るが故に。何を以て之れを言うとならば、若し佛力に非ずんば四十八願便(すなはち)是れ徒說ならん」と。○[16●1]和尚の云く、「自利眞實は利他眞實なり」と。云云　○[16●2]『觀經』に云く、「宿願力の故に憶想する┐有る者は、必ず成就する┐を得る」と。○[16●3]『華嚴經』六に云く、「若し一切佛の爲(みため)に護らるれば、則ち無上菩提心を生ず」と。○[16●4]『同經』十に云く、「若し聞く┐を得る┐有る者は當に知るべし、本願力なり。是の如く、佛の深法悉く能く善く受持す」と。○[16●5]又第一に云く、「如來能く無量の諸群生を開道して、能く悉く願樂して無上道を志求せしむ」と。○[16●6]『多羅菩薩經』の云く、「彼の時、觀自在微妙の言音を出だして、金剛手を驚覺し、秘密主諦らかに聽けり。我は無量寿の誓願從(よ)り生まれん」と。○[16●7]『往生論』に云く、「如來淨華の衆は、正覺の華より化生す」と。○[16●8]又云く、「天人不動の衆は、清淨の智海より生ず」と。○[16●9]『五會讃』に云く、「彌陀の願行廣くして邊(ほとり)無し。群[▲16]生を普く悉く憐れみ悲濟す」と。○[16●10]『觀經』に云く、「諸佛如來は是れ法界身にして、一切衆生の心想中に入りたまふ」と。

○[16●11]『願行品』三十九に云く、「佛智廣大にして虛空に同じ。普く一切衆生の心に遍し」と。○[16●12]『出現品』に云く、「譬ば大海の其の水潜かに四天下の地及び八十億の諸の小洲の中に流れ、穿鑿するヿ有れば、水を得ざるヿなし。而るに彼の大海、分別を作すことせず、我、水を出だす、と。佛智の海水亦復是の如く一切衆生の心中に流入す。若し諸衆生、境界を觀察し法門を修習するとき、則ち智慧を得て清淨明了す。而るに如來智は平等無二にして、分別有るヿ無し。但衆生の心行に隨って所得の智慧各々にして不同なり」と。○[16●13]『涅槃經』三十に云く、「世間は皆無明の殼に處して、智觜の能く之れを破るヿ有るヿ無し。如來の智觜のみ能く沮壞す。故に名けて最太子と爲す」と。○[16●14]『大集經』一に云く、「一には、無明を遠離す。[▽17]二には無明の殼を破る。三には大光明を作す」と。

○私に問て曰く、智遍法界は諸の報佛に通ず。何して今、別して彌陀一佛に約するや。答て曰く、既に諸佛に通ずれば彌陀何ぞ外ならんや。通は能く別を成ず。別は通を成らず。彌陀の智願海は悉く十方に潛流して、穿鑿するヿ有る時は、則ち清淨信心の智水を得。穿鑿するヿも自力に非ず。還りて佛智の所爲なり。如來の智觜能く沮壞すとは即ち是れなり。佛智能

く佛智を得しむ。能所共に他力なり。往相願力利他廻向を掲げん。知るべし。復試しに四句を作りて起盡を料簡す。一に自心他發。謂く他人自心を發せしむ。鐘の撥に依って聲を起すが如し。二に他心自發。謂く自ら他意を修習す。唇を窄めて笛音を作すが如し。三に自心自發。謂く識情の思慮、聲に任せて獨り謳ふが如し。四に他心他發。謂く力を與へて非分の智を得しめ、手を採りて鼓を擊たしめるがごとし。彌陀の他力、正に此の意なり。上に引く所は佛の持論なり。心化、又廻向品の分、即ち此の意なり。

○[17●1]『華嚴』第一の偈に云く。「如來能く善く無量の群生を開導して、能く悉く願樂して無上道を志求せしむ」と。○[17●2]抑、狐狸、人民を惑はして狐鳴を作す。心行所作、皆狐の所爲なり。彌陀衆生を化するに念佛を修す。心行所作、皆佛の所爲なり。信を名けて佛智と爲す。亦他力發起と言うは、即ち此の義なり。○[17●3]『華嚴經』の三十六に云く、「譬へば木人の若し機関無ければ、身即ち離散す。支分を具すと雖も運動する能はざるが如し。云云」と。

第二に**廣く慈悲を釋す**。初めに慈悲の體を明かし、次に慈悲の深きを示し、後に苦行の甚

だしきㄱを嘆ず。然るにその文紛列にして、科を亂る。應に隨ひて見るべし。○[17●4]『論註』下巻に云く、「苦を抜くを慈と曰ひ、樂を與へるを悲と曰う」と。○[17●5]『法界次第』上に云く、「他に樂を與へるの心、之れを名[▽18]けて慈と爲す。他の苦を抜くの心、之れを名けて悲と爲す」と。○[18●1]『要法文』の上に云く、「慈は樂を得しむ。悲は苦を離れしむ」と。○[18●2]『名義集』四に云く、「慈を愛念に名く。悲を愍傷と曰う」と。○[18●3]『佛地經論』の五に云く、「與樂抜苦の行相に異有れども、慈は是れ無瞋、悲は是れ不害。慈は無樂を縁じて其の樂を與へんと欲す。悲は有苦を縁じて其の苦を抜かんと欲す」と。○[18●4]『涅槃經』十四に云く、「恚(い)に二種有り。一に能く命を奪う。二に鞭撻す。慈を修すれば則ち能く彼の奪命を斷ず。悲を修すれば則ち能く彼の鞭撻を除く。乃至(十四文字)　瞋に二種有り。一には衆生を瞋り、二には衆生にあらざるを瞋る。慈心を修すれば瞋衆生を斷ず。悲心を修すれば非衆生を斷ず」と。○[18●5]又云く、「慈に三縁有り。一には衆生縁、二には法を縁とし、三には、則ち無縁。乃至(二十文字)　衆生縁とは五陰に於て縁じ、其の樂を與えんㄱを願ず。是れを衆生縁と名く。法縁とは、諸の衆生の所須の物を縁じて之れを施與す。是れを法縁[▲18]と名く。無縁とは、如來を縁とす。是れを無縁と名く。慈

とは、多くの貧窮の衆生を縁とす。如來大師は永く貧窮を離れ、第一の樂を受く。若し衆生を縁ずる時は則ち佛を縁ぜず。法も亦是の如し。此の義を以ての故に、如來を縁ずる者を名けて無縁と曰う。世尊、慈の所縁は一切衆生に父母妻子親屬を縁ずるが如し。此の義を以ての故に衆生縁と名く。法縁とは父母妻子親屬を見ず。一切の法は皆是れ縁より生ず。是れを法縁と名く。無縁とは、法相及び衆生相に住せず。是れを無縁と名く」と。[18●6]○『註論』に云く、「慈悲に三義有り。一は衆生縁、是れ小悲なり。二は法縁、是れ中悲なり。三は無縁、是れ大悲なり。大悲は即ち出世の善なり」と。[18●7]○『觀經淨影の疏』に云く、「慈悲心に大有り、小有り。攀縁(はんえん)分別する、之れ名けてを小と爲す。心想都(すべて)滅して、衆生に於て分別する所なく、自然に現益す。之れを目(なづ)けて大と爲す。小[▽19]の中に三有り。一に衆生縁。諸の衆生を縁じて其の樂を與へんと欲(おぼ)し、其の苦を抜かんと欲す。二は法縁。諸の衆生を觀じて、我無く人無し。但(ただ)五陰消滅し法數のみ有りと。而も慈悲を行ず。我無く、人無くんば、云何が慈を行ぜん。『維摩』に說くが如く、自づから生の爲に斯の如きの法を說かんと念ず。故に名けて慈と爲す。又念ずらく、衆生妄りに我人の爲に纏縛(てんばく)せらる。深く哀傷すべきが故に、慈悲を行ず。既に

衆生無し、誰の爲にか法を說かんと。誰か我の爲に纏縛せられしめん。『經』に無と言うは、但人性無きなり。幻化假名の衆生無きに非ず。故に、爲に之れを念じて縛を被ると說くことを得。三には無緣。陰は空寂の本、所有無しと觀じて、慈悲を行ず。法、既に有らず、云何慈を行ずや。亦両義有り。一には生の為に斯くの如きの法を說くと念ず、即ち是れ第一義なり。樂を人に與へるが故に名けて慈と爲す。二には、衆生を妄りに有法の爲に纏縛せらると念じて、深く哀傷すべきが故に慈悲を行ず。法、既に有らず。何くの處[19]にか人有って爲に說くや。釋して言く、彼の菩薩の自心に據っては實に人を見ず、亦法を見ず。故に說く所無し。人を見ざるが故に爲に說くべき無し。故に『經』の說きて言く、平等法界には佛、生を度さず。彼の衆生を以て菩薩を望むるに、衆生の外に於て別に菩薩有り。彼の菩薩、人法無しと說くを聞きて、妄を捨て實に契すなり。其の所得に同じくするを便ち菩薩、生の爲に法を說くと言う。故に、『經』に說いて言く、衆生を強いて分別して佛、衆生を度すと說く。此れ前の三種緣觀を修習するを通じて名けて小と爲す。大無量心に亦三種有り。一に衆生緣。無心に一切衆生を攀緣して、衆生に於いて自然に現益す。故に『涅槃』に云う、我實に往か

ず。慈善根力の諸の衆生をして是くの如く事を見せしむと。二に法縁。無心にして法を觀じて諸法に於て自然に普く照す┐、日の物を照すに分別する所無きが如し。三には、無縁。無心にして如を觀じて平等第一義の中に於て、自然に安住す」と。[19●1]○『次第禪』六に云く[▽20]、「法縁は諸々の漏盡の阿羅漢・辟支佛・諸佛、是の聖人をして吾我の相を破し一異の相を滅す故に。但因縁より相続して生ずと觀じて、慈を以て衆生を念ずる時、和合の因縁より相続すれば、但空にして五陰は即ち是れ衆生なり。見の五陰を念ずる此れ慈念なり。衆生は是の法空を知らず。衆生は常に一心に樂を得ん┐を欲す。聖人、之れを愍ひて意に隨って樂を得せしむ。世俗の法の爲に名けて法縁と爲す。無縁とは、是れ慈は但諸佛のみに有り。何を以ての故に、諸佛は有爲無爲の性の中に住まず。上下過去未來現在に依らず、諸の因縁不實顛倒虚誑なりと爲すと知る故に、心に所縁無し。佛、衆生の是れ諸法實相なるを知らざるを以て、五道に往來し、心諸法に著して分別取捨す。是の諸法實相の智慧を以て衆生に之を得しむ。是れを無縁と爲す。譬へば、衆生を縁じ貧人を給濟し、或は法縁財物金銀宝物を與へ、無縁意[▲20]神珠を與へるが如し。衆生縁・法縁・無縁も亦復是くの如し」と。[20●1]○『座禪三昧經』下に云く、「是

の慈三昧に略して説くに三種縁あり。生縁・法縁・無縁なり。諸の未得道を是れを生縁と名く。阿羅漢・辟支佛是れを法縁と名く。諸佛・世尊是れを無縁と名く」と。[20●2]〇『大集經』二に云く、「善男子、聲聞の人の悲は、猶し皮を畫(ゑ)がくが如く、菩薩の大悲は猶(なお)し肉を破るが如し。如來の大悲は骨を破り髓に徹る」と。[20●3]〇『薩遮尼乾子經』八に云く、「大王、當に知るべし。沙門の瞿曇(くどん)に十種の無量大慈の心有り。一には平等大慈悲、一切衆生を選擇せざるが故に。二には饒益大慈、能く天人善道涅槃を開き諸の惡趣を閉(と)づるが故に。三には救護大慈、畢竟じて能く一切衆生の生死の險難を度するが故に。四には、哀愍大慈、一切衆生を捨てずして諸根を長養(じょうよう)するが故に。五には解脱大慈、諸の衆生[▽21]の煩惱の契を滅するが故に。六には出生菩提大慈、諸の衆生に無上涅槃大菩提を示すが故に。七には諸の衆生に於て無碍大慈、大光明を放ち普く一切衆生界を照すが故に。八には虚空等大慈、一切諸の衆生を救護するが故に。九に法縁大慈、一切諸衆生を覺悟して等しく眞實の法を知らしむるが故に。十には無縁大慈、生死の實法性を證離するが故に。乃至[十文字]大王、當に知るべし。沙門瞿曇に十種の無量大悲の心有り。一には不共大悲、性大悲の故に。二には不厭大悲、一切衆生に代っ

て大苦を受くが故に。三には入一切惡道大悲、生死に處在して衆生を度するが故に。四には諸天人に於いて、受生大悲、諸法悉く無常なるㄱを示現するが故に。五には不捨一切邪定衆生大悲、無量劫に於て大誓心を起し莊嚴成就するが故に。▲[21]六には不著己樂大悲、爲に一切衆生に樂を與へるが故に。七には不求法大悲、自心清浄の故に。八には除滅一切衆生倒心大悲、實法を說くが故に。九には說眞法性大悲、諸の法界自性清淨を知るが故に。十には說空無所有大悲、諸の客塵煩惱に染まる爲の故に。大王、當に知るべし。是れを悲心と名く」と。

○[21●1]復この『經』の第六にに三十二種の大悲を說く。繁きが故に之を略す。○[21●2]『觀經』に云く、「佛心とは大慈悲是れなり」と。○[21●3]『行願品』に云く、「諸佛如來は大慈悲を以て而も心と爲す」と。○[21●4]同じく六に云く、「諸佛の心は是れ大悲なり」と。○[21●5]『十住毘婆沙論』十七に云く、「衆生の中の大悲とは、衆生は無量無邊なるが故に悲心亦廣大なり。復次に諸佛の法無量無邊無盡なるㄱ虛空の如し。悲心は是れ諸佛法の根本、能く大法を得んが故に▽[22]名けて大悲と爲す。一切衆生の中に最大者を名けて佛と爲す。佛の所行のなるが故に名けて大悲と爲す」と。○[22●1]同じ二に云く、「人有りて云く、菩提心に在るを名けて悲と爲す。悲、

衆生に及ぶを名けて大悲と爲す」と。○[22●2]『觀佛三昧經』の十に云く、「悲哀の心の生じて涙(なみだ)猛雨の如し、是の如き等の心を大悲と名く」と。○[22●3]『涅槃經』十に云く、「三世の諸(々)の世尊は大悲を根本と爲す」と。○[22●4]『行願品』の一に云く、「大悲を門と爲し、大悲を首と爲す」と。○[22●5]『涅槃』の十四(卅丁)に云く、「所有の善根は慈を根本となす」と。○[22●6]『大集經』の六に云く、「虛空の邊際は尚盡くすべし、世間の猛風は繫縛しつべし。菩薩所有の不退心は一切世間の轉ずる能はず」と。○[22●7]同じく十一に云く、「大地は壞しつべし、大海は燋(や)けつべし。須彌山王は碎きて塵の如くにすべし。衆生の諸の心は、合して是れを一にすべし。虛空は盡(つ)くしつべし、四大は轉じらるべし。佛の誓願は變易すべからず」と。○[22●8]『大悲芬陀利經』の五に云く、「若し我が是くの如きの立願(▲22)の意(こころ)滿たずんば、我是の一切の善根を以て廻向す。地獄の衆生に其の衆生有りて阿鼻地獄に在り。諸の苦の一切を受ける者(もの)、是の善根を以て、彼をして得脫せしめ、此の佛土に於て生を得て人と爲り、如來の法に値ひ、羅漢を得しめて涅槃に入る。彼の衆生業果盡さずんば、我、今命終って阿鼻大地獄中に生ぜしめん」と。○[22●9]『十住毘婆沙論』の三に云く、「若し衆生、都(すべ)て盡滅せば、我が願も便(すなは)ち息(や)むべし。隨っ

て世間性盡き、虚空性盡き、諸法性盡き、涅槃性盡き、諸佛性盡き、諸智性盡き、一切衆生心所縁性盡き、入佛法智性盡き、世間轉法輪智性盡れば、我が此の十願、爾乃し盡き息まん。但是れ衆生性等の十事實に盡きず。我が是の福德善根も、亦盡きず息まず」と。○[22●10]『梵網義記』の下に云く、「誓ひは是れ必固の願の中の勇烈の意なり」と。○[22●11]『入楞伽經』[▽23]の七に云く、「諸佛如來　乃至[二十四文字]　本願を捨てたまはず。衆生に樂を與へ、大慈大悲を具足する┐を得るを以て。我れ若し一切衆生をして涅槃に入れしめずんば、我が身も亦た涅槃に入らず」と。○[23●1]『同經』の二に云く、「菩薩方便して作願すらく、若し諸の衆生涅槃に入らざれば、我も亦涅槃に入らず」と。○[23●2]『如來會』に云く、「從ひ無間諸地獄に沈むとも、是くの如きの願心終に退せじ」と。○[23●3]『大經』に云く、「假令身を諸の苦毒の中に止るとも　我が行は精進にして忍びて終に悔いじ」と。○[23●4]『莊嚴經』に云く、「願くは我れ精進にして恒に決定して慈心を運びて有情を抜いて盡して阿鼻の苦衆生を度さん。發す所の弘誓永く斷せず」と。○[23●5]『賢劫經』の一に云く、「諸の群黎を愍ふを、假令身命骨髓血脈斷ずれども、終に懈怠を行ぜじ」と。○[23●6]『華嚴經』の十四に云く、「一衆生の爲の故に發心して阿耨多羅三藐三菩

提を求めて善根廻向せず。一佛刹を嚴淨せんが爲にせぬ故に。一佛を信ぜんが爲にせぬ故に。一佛を見上る爲にせぬ故に。一佛法を聞かんが爲にせぬ故に。一願を満足せんが爲にせぬ故に」と。23●7 ○又云く、「不可思議の大願悉く普く一切衆生を救護す。菩薩、此の願を立て已りて三世諸佛の廻向を修學す」と。23●8 ○又云く、「善根を修し已りて是の如くの念を作さく、我が修習する所の善根、悉く以て一切衆生を饒益せん。究竟清淨にしてこの所修の善根を以て一切衆生をして皆悉く地獄餓鬼畜生閻羅王等の無量の苦惱を除滅せん」と。23●9 ○『福德三昧經』下に云く、「菩薩の應當猶し橋の如し。上中下に於て別想無きが故に」と。23●10 ○『行願品』の八に云く、「普く十方衆生の諸行海を觀じ盡さば我が願乃し盡し、十方一切衆生の惑業海を竭さば我が願乃し盡し、悉く十方一切衆生の衆苦海を滅し盡さば我が願乃し盡し、悉く十方一切衆生の習氣海を抜き盡さば、我が願乃し盡きん」と。24●1 ○『華嚴經』の廿三に云く、「若し衆生盡れば、我が願乃し盡ん」と。廣說 24●2 ○同十二に云く、「善男子我が意の如きには盡未來に無間の苦を受けども、終に一念の瞋恚を發して、一蚊一蟻微細の衆生に惱害の想を起さず。何に況んや是の如きの惡業を造作せんや」と。乃至以下略 夢中云／廣說 24●3 ○『十

住毘婆沙』の三に云く、「若し衆生都盡滅せば、我が願便ち息むべし。隨て世間性盡き、虛空性盡き、諸法性盡き、乃至　一切衆生心所縁盡き、乃至　我が此の十願乃し盡く息まん」と。○『華嚴經』の二に云く、「無數劫海の諸有の中、難行苦行する、衆生の爲なり」と。○又云く、「大慈悲の雲、覆はざる、靡し、佛身難思にして衆生に等し」と。○同七に云く、「無量無邊大苦海、衆生の爲の故に悉く能く忍びて彼と事を同じふす。苦を念ざず、衆生を饒益して安樂ならしむ」と。○又云く、「或は衆生有りて壽無量と煩惱微細にして世間を樂しむ。斯の一切衆生類の爲に、生老病死の患を示現す」と。○又云く、「或は國王及び大臣と爲り、或は良医と爲り衆病を療し、或は曠野に於て大樹と作り、或は良藥無尽藏を爲す」と。○又云く、「無量の諸の橋梁或は舟船を作て衆生を度す」と。○又云く、「現に日月と作って虛空に遊び、普く十方諸世界を照し、或は河池泉水と作り、或は大海衆の寶器と作る」と。○同十四に云く、「此の諸の衆生、具に無量の大惡罪業有り。まさに無量無邊の楚毒を受くべし。我當に彼の三惡道の中に於て、悉く代って苦を受けて解脱を得しむべし。我當に代って無量の苦惱を受くべし。苦を以ての故に其の心退轉して恐怖懈怠して衆

生を捨離せず」と。○[24●12]又云く、「我當に一切衆生の爲に無量の苦を受けて、諸の衆生を悉く生死の沃焦[▽25よくしよう]を免出するㄱを得べし。我當に一切衆生の爲に一切刹一切地獄の中にして一切の苦を受けれども、終に捨離せざるべし」と。○[25●1]同十六に云く、「若し獄囚の諸の楚毒を受けるを見て、大悲心を起し、諸の庫藏妻子眷屬を捨てて身を以て獄に處し苦の衆生を救う」と。　廣說　○[25●2]同十七に云く、「我當に身を捨てて以て彼の命に代るべし。設使ひ苦痛彼に過ぎるㄱ無量なれども、悉く當に代って受けて其れをして解脱せしむべし」と。○[25●3]又云く、「或は貧人に諸の來り求める者に施し、普く施して遺すㄱ無し」と。○[25●4]『行願品』二十七に云く、「譬えば、人有って唯一子有り、愛念の情至る。忽に人に肢體を割截せ被るるを見て其の心痛切して自ら安るㄱ能はざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。諸の衆生の不善業を集めて三惡道に墮し種々の苦を受くを見て、心大いに憂惱して自ら安ずるㄱ能はず。若し衆生身語意の三種の善行を起し善道に生じて身心の樂を受くるを見ては、大歓喜を生ず」と。○[25●5]『涅槃經[▲25]』の十五に云く、「譬へば、父母は子の安穏を見て心大いに歓喜するが如し。菩薩摩訶薩も是の中に住するも、亦復是の如し。諸の衆生を視そなはすㄱ、一子

に同じ。善を修し見ては大歓喜を生ず」と。○25●6又云く、「譬へば、父母は子の患に遇へるを見ては心に苦悩を生ず。憂憫憂毒して初めてより捨離する亅無きが如し」と。○25●7又云く、「諸の衆生煩悩の病の爲に纏切せらるるを見ては、心に愁悩を生ず。憂念すること子の如く身の諸の毛孔より、血皆流出す」と。○25●8『觀佛三昧經』の六に云く、「悲とは衆苦を受くるを見ては、箭の心まで入り眼目を破るが如し。心極めて悲痛し遍體血を雨ふらして、彼の苦を抜かんと欲す」と。○25●9『涅槃經』の十八に云く、「譬へば一人にして七子あらん。七子有りて是の七子の中に一子病に遇へば、父母の心平等に在らざるには非ず。然れども病子に於て心則ち偏に重きが如し」と。○25●10『觀經疏』の「玄義」に云く、「然るに諸佛の大悲は、苦ある者に於て心偏に常没の衆生を愍念したまふ」と。○25●11『法華經』二に云く、「今此の▽26三界は皆是れ我が有也。其の中の衆生は、悉く是れ吾子なり」と。○26●1『涅槃經』の十八に云く、「如來一切の常に慈の父母と作る。當に知るべし、諸の衆生は皆是れ如來の子也。世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修する亅、人、鬼魅に著れて狂乱して所爲多きが如し」と。○26●2『同經』三十の師子吼菩薩讃佛偈に云く、如來無量の功德聚は我今廣く宣説する亅あたはず。

乃至七行　他の苦を受くる見ては、身戰動し、地獄に所在すれども痛みを覺えず、諸の衆生の爲に大苦を受く。是の故に勝無く、量ある┐なし。如來衆の爲に苦行を修し、成就具足して六度を滿つ。心、邪風に處すれども、傾動せず。是の故に能く世の大士に勝されり。衆生常に安樂を得んと欲す、しかも、安樂の因を修する┐を知らず。如來、能く教えて修習せしむ。なおし慈父の一子を愛するが如し。佛、衆生の煩惱の患いを見て、心苦しむこと、母の病子を念じて、常に病を離るる諸の方便を思うが如し。是の故に此の身は他に繫屬す。　乃▲26二十行至

是の故に一切諸の智者、如來の報を求めざる┐を称說す」と。26●3○亦云く、「恩を施すと雖も、而も報を求めず」と。26●4○『同經』三十四の迦葉菩薩讃佛偈に云く、「苦を受けども苦を覺らず。衆の苦を受ける見て、己の苦の如し。衆生の爲にと雖も地獄に處すと。苦の想及び悔心を生ざず、一切衆生の異苦を受ける。悉く是れ如來一人の苦なり。己を覺るも、其の心轉堅固なり。故に能く無上道を勤修す」と。26●5○『同經』二に云く、「我往昔に於て種々に苦行して今是の如くの無上方便を得たり。汝等が爲の故に無量劫中に身・手・頭・目・髓・惱を捨てたり。是の故に汝等、應に放逸なるべからず」と。26●6○『大論』十四に云く、「菩薩、

一切を育養するㄱ之れを愛するㄱ子のごとし。若し衆生菩薩を瞋惱すれば、菩薩之れを愍んで瞋らず責めず。譬へば慈父の子孫を撫育するが如し。子孫幼稚にして未だ所識あらず、或る時は罵詈打擲(ばりだてき)して、敬わず畏れざれども其の父、其の愚小之れを愛するㄱ▽27逾(ますます)至りて過罪有りと雖も瞋らず責めず。菩薩の忍辱(にんにく)も亦復是の如し」と。○27●1『菩薩處胎經』三○に云く、「吾無數劫より生死の道に往來して身を捨てて復身を受け胞胎の生を離れず。我が經歷する所を計(はか)るに一(ひとつ)を記して餘を記さず。純ら白狗の形に作(な)りて、骨を積むㄱ億須彌なり、針を以て地種を刺すに我體に値(まうあ)はずといふㄱなし。何に況んや餘色の狗其の數量るべからず。吾(われ)、故に其の心を攝して放逸に隨はしめず」と。○27●2『大悲經』四に云く、「我菩薩の時、久しく苦行を修して王位婦兒妻子及び妹女身命手足頭目耳鼻血肉骨髓を棄捨し、及び種種無量の苦痛を受けたり。彼等の一切は悉く汝等に阿耨多羅三藐三菩提を悕求させんが爲の故なり。阿難、一切の捨て難きを、我、悉く已に捨てにき。受くる所の衆苦は悉く衆生の爲なり。阿難、此れ等の功德、若し我れ廣く說くも則ち盡くせず。而るに聞くㄱ有る者は、▲27心則ち迷悶せん。況んや說く者有らんや。阿難、若し衆生有て一念の心を起して釋迦牟尼如來の本昔菩薩の苦

行を修行するㄱを悲愍して、是の如きの言を作し、『我等が爲の故に具に無量種々の苦痛、爲し難きの事を受けたまへり』。阿難、我説く彼等の一念、心を發す者は必ず、定めて當に最後涅槃を得べし。何に況んや我が所にして善根を種る者をや」と。○[27●3]『同經』の五に云く、「佛如來の諸の妙法を説くを聞きて深く義趣を解して如來を憶念し、心に愛敬を生じ涙を抆(ぬぐ)ふㄱある者、長嘆する者、毛竪(よだ)つ者、若し地獄・畜生・餓鬼に墮すと云はば、是の處(ことはり)有るㄱ無し」と。○[27●4]『涅槃經』の十六に云く、「譬ば長者の其の家、火において失す。長者見已りて、家より而して出づ。諸子は後に有りて未だ火難を脱せず。長者、而の時定んで火害を知って諸子の爲の故に旋還して赴き、救いて其の難を顧みざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復(また)是の如し。生死は諸(々)の惡に遇(でくわす)こと多しと雖も、衆生の爲の故に之に處▽[28]して厭わず。是のゆえに復た不思議と名づく」と。○[28●1]『無上依經』の上に云く、「譬へば豪家の長者に唯一男有り、端正聰黠(そうかつ)にして保念愛惜す。乃至[二十文字]大深坑糞穢死屍膓爛臭處に墮つ。其の兒の母親および眷屬、子の坑に墮つるを驚喚して大いに叫ぶ。乃至[十二文字]復悲號すと雖も而の身力無く怯弱にして此の深坑に入りて子の苦を救抜するㄱ能はず。是の時長者　乃至[四文字]子を念ずる心重くして臭穢を厭わ

ず、自ら坑中に入り子を捉えて牽出するがごとし」と。乃至已上　私に云く、此の中に深坑とは三界なり、一子とは凡夫なり、眷屬とは二乗なり、長者とは菩薩なり。廣く往いて見るべし。○[28●2]『大集經』二十六に、「譬へば、一城有って縱廣一由旬なり。多くの諸門有りて、路険しく黒闇にして甚だ怖畏すべし。入城の者有り、多くの安樂を受く。復一人有り、唯し一子有り。愛念甚だ重し。遙かに彼の城の是の如くの快樂を聞きて即便[▲28]子を捨てて往いて城に入らんと欲す。是の人方便して険道を過ぐるを得て彼の城門に到る。一足は已に入り、未だ一足を擧げざるに、即ち其の子を念じて、尋ねて是の念を作す。我唯一子なり、來る時云何。竟りに與に俱ならずんば、誰か能く養護して衆苦を離れしめん。即ち樂城を捨てて還って子の所に向くが如し。善男子、菩薩も亦復是のごとし。憐愍の爲の故に上通を修習し、修習し已りて漏を盡くすを得るに垂として、而も證を取らず。何を以ての故に、衆生を愍が故に、漏盡通を捨て乃至凡夫地の中を行ず」と。○[28●3]『涅槃經』の十四に云く、「夫れ慈を修するは實にして妄想に非ず。諦に是れ眞實なり。若し聲聞・緣覺の慈は是を虛妄と名く。諸佛・菩薩は眞實にして虛ならず」と。○[28●4]『同』八に云く、「如來は實に憂悲苦惱無し。而

るに衆生に於て大慈悲を起す。憂悲有るヿを現ず。諸の衆生を視そなはし玉ふヿ、羅睺羅の如し　乃至　有憂無憂は是れ佛の境界なり」と。廣說　○[28●5]『法事讃』の上に云く、「道場衆等、[▽29]各々慚謝の心を生ずべし。能く諸佛我が爲に身を捨てしむるヿ塵劫を過ぎたり。哀れなる哉、世尊能く難事の爲、長劫に勤々として疲労の苦痛を忍びたまふ。復た衆生の爲に苦行すと雖も、小恩をも覓(もと)めず、等しく塵労を出で、菩提を會して彼岸に帰するヿを望欲したまへり」と。

○私に云く、菩薩の布施・忍辱・愛語・同事等の一切の願心悲心苦行の相は、凡そ大藏の塵卷、其の慈相を說くに在り。具に出だすべからず。夫れ、父母の如きは愛念骨を切る。未だ我が爲に一指をも斷せず。亦我が爲に一命を捨てず。況んや餘人をや。能く誰か身命を捨てんや。塵劫塵身、諸佛の苦行・捨命・捨身、菩薩の慈悲は、しかしながら我が一身を憐れむに在り。噫(ああ)、恩德海實に極まり無し。誰か慚せざらんや。誰か謝せざらん者や。

讃佛慈悲集　本終

讃[▽01]佛慈悲集　末

第三に其の恩を報うべき┐を解すとは、上の諸文を按ずるに、天に三光有るも佛恩なり。地に百穀有るも佛恩なり。雨下り水涌き火熟し風養うも佛恩なり。一華開き一菓成り一藥採り一珠を出(いだ)すも佛恩なり。山野に途を闢き江河に舟を作るも佛恩なり。絲竹の音曲を出し藝能の浮樂を為すも佛恩なり。又、目の視、耳の聴、口の言ひ、身の動も佛恩なり。一衣の衣、一味を味ふも、一命を全うし一生を終ふも佛恩なり。病瘥(い)へ、災い除き、災いを除き、眷屬を得、資具を得るも佛恩なり。惡鬼毒龍の世を損なわず、毒藥利刺の人を害せざるも佛恩なり。父を知り、子を知り、善を識り惡を識るも佛恩なり。一字を聞き、一句を解し、世善を作し、出世を願うも佛恩なり。凡そ是れ冥冥たる黒闇のほか、人間(じんかん)天上、依報正報微善微樂、悉く皆佛恩のしからしむるにあらずということ無し。[▲01]

是を以て『智論[1●1]』二十二に云く、「一切衆生、皆佛恩を蒙る」と。一世是の如し、萬世亦た而なり。乃至無邊劫亦復是の如し。一佛既に而なり。多佛多菩薩亦復是の如し。虚空盡きるべし、佛恩は盡すべからず。吁痛しき哉。我等幾千か佛肉を食い、幾千か佛血を吸い、幾千か佛命を斷ち、幾千か佛の眼を挑み、幾千か佛肩に挂り、幾千か佛皮を衣たる。『[1●2]大悲經』には「具に説かば聞く者悶絶せん」と云ひ、『[1●3]止観論』には「恒沙の身命を捨つも報ずること難し」と云へり。

問て云く「聖教を按ずるに、依正苦樂等、皆是れ衆生の業感と云へりと。今何の意ぞ、但佛恩と云や」。答えて云く、「能感の業、所感の報、若し佛力に非らずば、何ぞ能く之を成ぜん。諸佛の願行、實に是れ虚しからず。亦上の文の如し」と。

○[1●4]『大論』四十九に云く、「次に恩を知るとは、大悲の本善業を開く。初門に人に敬愛する所乃至[十一文字] 恩を知らざる人は於[▽02]て畜生よりも甚だし」と。○[2●1]『不思議境界經』に云く、「恩を知る者は、生死に在りと雖も善根を壊さず。恩を知らざる者は、善根斷滅して諸の悪業を作るが故に、諸の如來、知恩を稱讃し背恩の者を毀す」と。○[2●2]『業報差別經』に云く「復十

業有り、能く衆生をして地獄の報を得しむ。何等をか十とする。一には身に重悪業を行ず乃至（四十九文字）十には恩報を知らず。是の十業を以て、地獄の報を得」と。○[2●3]『賢護分』三に云く、「常にまさに恩を識り、恆に徳を報ずることを思うべし」と。○[2●4]『大集經』十に云く、「復四法有り、大乗の法を障う。（三十九行七文字乃至あり）一には恩を知らず。二には恩に報いず。三には、恩に背き、四には邪見を樂（この）む」と。○[2●5]又『賢護分』に云く、「まさに念憶持して常に師恩を念じて恆に報答することを思ふべし」と。○[2●6]『華厳經』十四に云く、「大願を捨てず、衆生を救護す。若し衆生、濁悪無信にして恩に報ひるを知らざるを、菩提を修習していまだかつて懈癈せず」と。○[2●7]『報恩經』三に云く、「佛阿難に告げたまはく、まさに父母及び善知識の恩を念ずべし。是の故に恩を知りて常にまさに恩を報ずべし。善知識と云うは是れ大因縁なり」と。○[2●8]『念仏三昧經』に云く、「若し善知識に於て恆に其の恩を念報せよ」と。○[2●9]『大集經』十に云く、「復二法有り。大乗を利益す。一には知恩、二には念思なり」と。○[2●10]又云く、「復二法有り。一には恩ある處に於て、常に之れを報いんと欲す。二には恩と無恩とに於て等く而（して）之れを報ず」と。○[2●11]『賢護分』四に云く、「他の小恩を受けて、尚（な）を厚

く報ぜん┐を思う。何況(いか)んや、人重徳有りて、而(しか)して敢えて輒(たやす)く忘れんや」と。

○[2●12] 私に云く、報恩の徳、背恩の質、感報現業廣く經史に見へたり。詳(つまびらか)に此(ここ)に出(い)だすべきのみ。○[2●13]『報恩經』七に云く、「初めに菩提心を発す時、恩を知り恩を報ず」と。○[2●14]又云く、「若し善男子善女人有りて、恩を知り徳を報ぜば、まさに四事を行ず。一には善友に親近す。二には至心に法を聽く。三には其の義を思惟し、五には節の如く修行す」と。○[2●15]又云く、「先づ[▽03]自ら煩悩諸根を調伏し、然して後、法を聽く。非時に聽かず。至心に法を聽き、説者を恭敬し、法に於て尊重す。是を菩薩の知恩報恩と名く」と。○[3●1]『心地觀經』三報恩品に云く、「若し清淨善男子等有りて、乃至(十二文字)無所得を以て三輪體空して竊に一人の為に四句の法を説き、邪見の心を除き菩提に趣向せば、是を即ち名けて四恩を報ずとなす。何を以ての故に。是の人はまさに無上菩提を得べし。展轉して無量の衆生を教化して佛道に入らしめ、三寶の種子永く斷絶せず」と。○[3●2]『大集』の十六に云く、「能く恩を報ずる者は、善業を造り、能く勤めて精進にして道を失はず」と。○[3●3]十三に云く、「我れ若し恩を知る、何んぞ報ぜざることを得んや。若し衆生有りて菩提道を修行せることを能はずんば、是の如くの人は則ち

報ずる┐能はず」と。○[3●4]『大般若經』四百四十三に云く、「若し問ふて言う┐有らんに、誰をか是れ恩を知り能く恩を報ずる者と。まさに正に答えて言ふべし、佛は是れ恩を知[▲03]り能く恩を報ずる者(ひと)なり。何を以ての故に、一切世間に恩を知り恩を報ずる┐佛に過ぎたるは無き故に」と。○[3●5]『増一阿含經』に云く、「その時に世尊、諸の比丘に告げたまはく、若し衆生有りて返復を知る者は、此の人は敬ふべし。小恩尚(な)を忘れず、何に況んや大恩をや。設(たと)ひ此の間を離るる┐百千由旬あれども、猶(なほ)我が近くに異らず、我れ恆に嘆譽す。若し衆生有りて返復を知らざる者は、大恩尚(なほ)を憶へず。何に況んや小恩をや。彼(かれ)我に近くに非ず、我れ彼に近からず。正しく使(たと)ひ僧伽梨(そうぎやり)を被りて吾が左右に在りとも、此の人猶を遠し。是の故に比丘、返復を念ずべし」と。○[3●6]『涅槃經』法顯譯　の中に云く、「佛、阿難に告げたまはく、我れを供養し恩を報ぜんと欲せん者は、必ずしも此れ香華伎樂を以てせざれ。禁戒を淨持し諸法深妙の義を読誦し思惟せよ。斯れ則ちを名けて我れを供養すとなすなり」と。○[3●7]『十住毘婆沙論』の巻十五に云く、「經に説くが如し。般涅槃の時、佛、阿難に告げたまはく、天より文荼羅華及び栴檀抹香[▽04]を雨(あめふ)らし、天の伎樂を作す。如来を供養し恭敬すとは名付けざるなり。阿難、

若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、一心にして放逸ならず、親近して聖法を修集す。是れを眞に佛を供養すと名づく」と。○[4●1]『法華』に一に云く、「法を聞き歓喜して讃じて 乃至一言を発するは、則ち已に一切三世の佛を供養するに爲なりたり」と。○[4●2]『法華経』の七に云く、「若し衆生在りて、信受せざる者には、當に如來、餘の深法の中に於て、示教して利喜すべし。汝等、若し能く是の如くせば、則ち已に諸佛の恩を報ずと爲す」と。○[4●3]又云く、「善哉(よきかな)々々。善男子、是れ眞の精進なり、是れを眞法を以て如來を供養す名づく」と。○[4●4]同じき『經』に云く、「三界の苦惱の患を脱するㄱを得て最後身は有餘涅槃に住せり。佛、教化する所は、得道にして虚しからず。則ち、已に仏の恩を報ずるㄱを得と爲す」と。○[4●5]『賢劫經』の一に云く、「仏を供養せんと欲せば、當に法を以て供養すべし」と。○[4●6]楞厳院、『經』を引て云く、「流轉三界の中は恩愛[▲04]斷ずること能はず。恩を棄て無爲に入れば、眞實に恩を報ずる者(ひと)なり」と。○[4●7]『大集』の十一に云く、「汝、今出家す。即ち是れ佛に報ずるなり。若し能く是くの如き信をを生じて捨離する。是れを大報と名づく」と。○[4●8]『報恩經』の一に云く、「諸の大菩薩、速かに菩提を成し佛恩を報善が爲の故に」と。○[4●9]『同』く二に云く、「如來の所(みもと)に於て大師

の想を生じ、慈父の想を生じて、常に佛恩を念じ當に佛恩を報ずべし」と。○[4●10]又云く、「恩を知る者は、當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。恩を報ずる者は、亦當に一切衆生を教えて阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめるべし」と。○[4●11]『十住毘婆沙論』の十五に云く、「若し一の惡人を捨てれば、則ち佛恩に背くと爲す。是の故に惡衆生を、中に於て捨つべからず」と。○[4●12]又云く、「五の恩縁を以ての故に、應に正法を受護すべし。一には諸佛を報ずるを知るが故に。二には法を久しく住せしむるが故に。三には最上の供養を以て諸佛を供養するが故に。四には無量の衆生を利益するが故に。五には正法を第一[▽05]にして得難きが故に」と。○[5●1]『大論』の偈に云く、「假使頂戴し塵劫を經るも身を牀座と爲して三千に遍すとも、若し法を傳へて衆生を度せずんば、決定して能く恩を報ずる〕無き者なり」と。經之偈也 ○[5●2]和尚の云く、「自ら信じ人をして信ぜ教むるは、難きが中に轉更に難し。大悲を傳へて普く化すれば、眞に佛恩を報ずるに成る」と。○[5●3]『無上依經』下に云く、「我れ今正行を見る〕能はず。此れを修して持てば世尊の恩を報ず。若し人已に無餘滅に到らば、此の人猶未だ佛恩を報ぜず。若し人能く佛の正行を行ず。是の人は、唯自利の法を修す。世尊の疲極は衆生の

ためにして、無上の深恩、云何報ぜん」と。○5●4『念佛三昧經』の五に云く、「此の三昧を修行し、淨妙の法を敷延し、彼に一切の樂を施せば、是の人は則ち佛と其の大悲心を同じふす」と。○5●5『大集』の十五に云く、「恩を報ずるㄱを知らざる者を、是れを魔業と爲す」と。○5●6又云く、「施しを行じて法を望むは、是を魔業と爲す」と。○5●7「定善義」に云く、「若し一人苦を捨てて生死を出るㄱを得しめば、是▲05を眞に佛恩を報ずると名づく」と。

○5●8私に云く、一切の恩海は諸佛の慈恩に極まり、諸佛の慈恩は弥陀の大恩に極まる。何を以ての故に。我等凡夫、阿弥陀佛の恩に依って永く生死を出づるㄱを得るが故に。是の故に弥陀を以て佛恩の極まりと爲す。然るに報恩の法、復無量なりと雖も、しかして念仏を以て其の根と爲す。何を以ての故に、弥陀仏の本願なるが故に。亦諸佛勸證の法なるが故に。問て云く、念仏報恩は其の證有りや。答て云く、上の諸の文、其の義分明なり。又た現に文無きにあらず、と。

○5●9『念仏三昧經』の四に云く、「空見にあらず。我れ今略して一切諸佛所説の三昧を説く念佛三昧。當に勤修して佛恩を念報すべし。三昧を學し已りて、即ち阿耨多羅三藐三菩提に退

さざるㄱを得ん」と。○[5●10]『坐禪三昧經』の上に云く、「若し人、香華を以て供養し、骨肉血髓を以て塔を起て供養せしより、未だ行人の法を以て供養して涅槃に至るㄱを得んにはしからず。然れども猶を佛恩を負うて設當念佛の空しく獲る所無しと雖も、猶を應に勤心に專念して忘れず、以て佛恩を報ず乃至[三十六文字]是れを念佛三昧と名づく」と。○[6●1]『大論』の七に云く、「譬へば大臣の時々に恩寵を蒙り常に其の主を念ずるが、菩薩も亦た是の如く種種の功德皆佛に從ひて得ると知り、恩重を知るが故に常に念佛す」と。○[6●2]『般舟讃』に云く、「念佛を相續して師恩を報ぜよ」と。○[6●3]『禮讃』に雜修之失を釋して云く、「又相續して彼の佛恩を念報せざるが故に」と。○[6●4]偈文に云く、「唯だ能く常に如來の名号を稱して、應に大悲弘誓の恩を報ずべし」と。○[6●5]『大悲經』の三に云く、「我が法中に於て、但性は是れ沙門ならしめて沙門の行を汚すも、自ら沙門と稱し形沙門に似て當に袈裟衣を被る者あるべし。此の賢劫の弥勒を首と爲し乃至最後の盧遮如來まで、彼の諸の沙門、是の如きの佛所にして、無餘涅槃界に於て、次第に當に涅槃に入るㄱを得べし。遺餘有るㄱ無し。[▲06]何を以ての故に。阿難、是之如き一切の諸の沙門乃至一たび佛名を稱せしは、一たび信を生ずる者の所作の功德、

終に虚設ならず」と。○[6●6]『同』じく五に云く、「佛如來の諸の妙法を説くを聞いて、深く義趣を解し如來を憶念し、心に愛敬を生じ、涙を抆ふ㆒有る者、長嘆する者、毛の竪つ者、若し地獄餓鬼畜生に墮つといはば、是の處り有る㆒無し」と。○[6●7]『觀念法門』に云く、「敬いて一切の往生人等に白す。若し此の語を聞きて即ち聲に應じて悲しんで涙を雨らし、連劫累劫に身を粉にして骨を碎き佛恩の由來を報謝して、本心に稱ふべし。豈敢えて更に毛髪も之れを憚る㆒有らんや」と。○[6●8]知覺禪師の『萬善同歸集』中に云く、「慙を懐き愧を抱えて常に慶幸の心を生じ、分を識り恩を知りて、恒に報酬の想を起すべし」と。○[6●9]禪林寺の『往生講式』に云く、「靜かに往昔結縁の厚き㆒を思へば、心念々に恃み有り。倩大悲誓願の深き㆒を思へば、涙連々として留まらず。實に四十八[▽07]大願は併せながら衆生の爲、阿僧祇の具行は偏に我等が爲なり。何なる彌陀なれば發難きの願を發し、我等を引接したまふ。何なる我等なれば、遇ひ難きの願に遇ひて、彌陀を念ぜざる。速やかに萬事を抛ちて、一心に稱念すべし。悲願は是れ深し、引接何をか疑はんや。」

○私に云く、予、此れ等の文を見る毎に頗る感信無きにあらず。故に一二を略し取りて、類に依って編集す。彌陀有縁の人・念佛同心の輩（やから）、何ぞ此れを嘲（わら）んや。此れ則ち佛の悲心恭敬の相を知らしめんと欲ふ。復、他力深重の義を思はしめんと欲し、復、傲慢我執の情を伏（ふく）せしめんと欲し、復、自らの自力を捨て、他力に歸せしめんと欲し、復、人をして佛恩を談ぜしめんと欲し、復、慙愧感歎の心を發さしめんと欲し、彌陀に歸して酬報の想ひを起さしめんと欲し、復、歡喜念佛せしめんと欲してなり。是れ皆な同好願生の人に於てして、亦、未聞の人に於てす。何ぞ聞知見識の學者を勞はせんや。

▲07 讃佛慈悲集　末終

貞享四　丁卯　年四月十五日草編之同年臘月廿日　俄清書之畢　　西福寺慧空四十四歳

『華厳経』[7●2]の廿二[十六丁]に云く、「菩薩若し自ら梵行を修せずして、他をして梵行を淨修せしめば、是の處有るㄱ無し。菩薩自ら梵行を退き、他をして梵行具足せしめば是の處有るㄱ無し。菩薩自ら梵行を破して、他をして梵行立安せしめば、是の處有るㄱ無しと、廣く説く」と。

又云[7●3]く、「菩薩自ら疑悔を離れ、他をして疑悔を離れしむる菩薩は、自ら歡喜信心を得て、他をして不壞信を得しむ。廣く説く」と。

同廿四[7●4]に云く、「若し人、善を行ぜずして他の爲に説法して、善に住せしめば「是の處」有るㄱ無し」と。

附　録

後　　記

この「讃佛慈悲集」書下し文は、浄土真宗の学びにおいて「他力」ということをより明らかにする事を目的とした、学習資糧の一つとせんがためである。宗門において「浄土真宗の他力」ということへの言及が少ない中で、「讃佛慈悲集」は「問題点を提示する貴重なもの」であると思う。むろんそのことが、「讃佛慈悲集」の内容の肯定を示すわけではない。「昔の偉い先生が書いたものだから」ということでの価値ではなく、浄土真宗の教えとしての「他力」ということが、現実の生活の中でどのように展開できていくのか、そのことを明らかにする資糧として、今までほとんど宗門内で無視されてきたこの「讃佛慈悲集」を改めて読むべきではないかと思う次第である。

現代において、この忘れられた「讃佛慈悲集」を掘り起こしたのは、最初にも記したが、宗正元先生だった。遅くとも一九九〇年代中葉には神田神保町で原本『讃佛慈悲集』を入手されて、『教行信証』を背景にして慧空の「讃佛慈悲集」を読み込もうとされた。その途中において、宗先生が関係する聞法会（少なくとも二ヶ所）において慧空の「他力の六義」ということを教えておられたのだが、その中の「弥陀別益の他力」を「転成」と言われたことが一回はある。それ以外にどこでそのことを説かれていたのか詳らかではない。私が聞いた宗先生の講義の中で「弥陀別益の他力」を「転成」という内容で取り上げることはなかったと思う。そこに宗先生の「言いよどみ」を感じるのである。宗先生の講義を比較的長く聞いていた私においては不可解なことであって、それが逆に私において「弥陀別益の他力」と「転成」の関係をもっと明確にすべき時代ではないかと思うようになっていた。

そういう中で、たまたまの出来事が重なって、宗先生がお持ちだった『讃佛慈悲集』が、私の手許に来ることになって、私に火が点いた。「もうやるっきゃない」のである。私の手許にきて三ヶ月ほどで、そういうこともご存じなく宗先生は身罷りになって、いよいよ「宗先生からの課題」ということが明確になってきた。

まあ、私だけでは心もとないので、先ずは「七点セット」を電子版という形で世に出して、刺激しあう人を求めたいと思っている。私も、歳も歳だからいつまでこのことに意欲を持てるかは判らないが、「ケツを蹴っ飛ばす人」が現われることを、切に願っている。

（大竹　記）

（奥付）

「讃佛慈悲集」書下し文

発　行：仮立舎

書下し文作成者：遍立寺衆徒　　大竹　功

校了日：令和三年（二〇二一年）九月一五日

原　本：『讃佛慈悲集』の中の「讃佛慈悲集」

貞享四年版と名づく

「讃佛慈悲集」を学習資糧とする七点セットの無料公開

- 電子版「讃佛慈悲集」（原本実物大コピーが可能）
- 電子版冊子「讃佛慈悲集」における引用文献の確認
- 電子版冊子「讃佛慈悲集」書下し文（当冊子）など

玄黄洞　三之洞　で検索してください。